

# 「この道より我を生かす道なし」

全障研兵庫支部顧問 河南 勝

津田先生が亡くなって2年、命日の10月25日に近いある日、家を訪問して線香をあげることができた。晩年、取りつけられた手すりを支えに一段一段、階段をあがり家に入る姿が目には焼きついている。集会の迎え、支部総会、一泊研究会、全国大会の参加送迎など何度となく訪問して目にしてきた風景だ。なかでも、毎年の全国大会参加は最大の楽しみの一つで、「一緒に行きましょう。迎えに行きますよ」と電話すると、毎回「もう今年が最後になるかもなあ。そしたら頼むわ」と電話がかかるのを待っておられた様子だった。

進行性筋疾患「封入体筋炎」の発症確認が2003年、教職38年終了後の闘病生活のはじまりになった。杖をついての歩行から車いすでの移動、そしてほとんどベッドでの生活。進行にともなって不自由さが増すばかり。主治医に「残りの人生を、できないことばかり考えてないで、今の状態でできることを最大限生かすために、なにが必要なのか考えてみよう」とアドバイスを受けて、はっとされた。「障害児教育人生50年のまとめをして次世代に手渡したい」と、新たな夢に火をともしられた。

義務制以前の阪神養護学校での障

害の重い子どもの教育権保障運動は「上限はあっても下限はない」という「全入」の理念に結実。県立移管に反対する運動、阪神養護の過大解消のための第二阪神養護（こやの里養護）の建設の問題、介助員の働く権利を守る運動、高等部入学三原則に反対し学ぶ権利を保障する運動と激動の時代をリードしてこられた。

そして、神戸大学附属養護学校に転勤し、副校長として退官するまでの職場民主化、発達保障の視点での実践の積み上げが著書『まわり道をいとわないで』に集約されている。そこには「教育は子どもの権利」「発達保障の視点に立って実践を」との考えが貫かれていた。阪神淡路大震災の際には、自宅の尼崎から明石までを歩いてかけつけ、学校の再開に向けた陣頭指揮をとられた。後に、職場に開かれた人間関係が構築できているか、子どもが主人公の学校づくりができているかを点検できる機会になったとふりかえっている。

\*

津田先生の魅力は、なんととっても大きな声、やさしい笑顔。いつもみんなを笑わせて、励まし、元気づけてくれる存在だった。

過去2回の兵庫での全障研大会開



## 津田充幸さん

つだ みつゆき / 1939年～2016年。  
全障研結成とともに障害児学級担任・養護学校教員の道へ。全障研全国委員、全障研兵庫支部副支部長、兵庫障害者連絡協議会会長などを歴任。著書に『まわり道をいとわないで』（クリエイツかもがわ）など。

催では大きな力を発揮し、大成功に導く組織者でもあった。全国委員、副支部長、兵庫障害者連絡協議会会長など数多くの役職を引き受け、まさに兵庫の障害児教育障害者運動の要の役割を果たしてこられた。事務局会議の帰りなどにいろいろな話を聞かせてもらい、兵庫の障害児教育の歴史や運動を学び、「発達保障の立場こそが大事だ」と話してもらったことが印象に残っている。津田先生は自身の歩みを次のような言葉で残しておられる。

「面倒なことから逃げるな この道より我を生かす道なし この道を行く」。

(かんなん まさる)